

京都府生協連ニュース

2012年6月1日・No.81(通算 147号)
京都府生活協同組合連合会
京都市中京区烏丸川東南角せいきょう会館2階
TEL. 075-251-1551
FAX. 075-251-1555

3月17日(土)、御所西・京都平安ホテルで、2012国際協同組合年を記念するとともに、京都府生活協同組合連合会創立60周年を記念しての式典・レセプションを開催しました。

賀川記念館・賀川督明館長から「賀川豊彦と協同組合」と題して、記念講演をいただきました。

「賀川豊彦と協同組合」



講師：賀川記念館

賀川督明 館長

<講演内容>

- I. 賀川豊彦たちの活動にみる「総合性」の視点
- II. 貧困の撲滅と協同組合運動
- III. さまざまな社会運動の「ゼネラリスト」集団として
- IV. 歴史を背負いながら、今の課題に向き合う
- V. 地球規模の問題にどのようにアプローチするか
- VI. 「プラスのシェア」「マイナスのシェア」
- VII. むすびに～2つの大切にしたいこと

I. 賀川豊彦たちの活動にみる「総合性」の視点

■「領域の細分化」の進行

きょうは、「賀川豊彦と協同組合」というテーマを与えられましたが、京都府生協連の創立60周年にあたって、わたし自身も「60年の歴史と未来」ということを考えなければならないと思いました。というのは、京都府生協連が創立されたのは1951年ですが、わたしは1953年生まれです。京都府生協連の活動は、わたしの人生とほぼ同じスパンをもっているわけで、この60年

間の歴史をどのようにうけとめたらいいのかを考えてみたいと思いました。

いろいろな見方があるかと思いますが、わたしは、これまでの60年は、物事のわかりやすさを追求するため、事柄の概念を細分化し、分類をすすめてきた60年ではなかったかと考えています。とくにアカデミックの世界では、物事を深く掘り下げたり、うけとめたりするために、「領域」をととても細かく設定してきました。行政も、いろいろな物事を運営するときに、「領域の細分化」をはかります。

たとえば、いま、わたしたちの目の前にあるコップも、「ガラスの器」という概念ではなくて、「水を飲むための〇〇cc入るカップ」というふうに分類するわけです。そうすると、200ccではない、150ccのカップが必要になり、さらに100ccのカップが必要になって、どんどんカップの数が増えてきます。ありとあらゆる分野で「領域の細分化」がおこなわれてきたのが、戦後の60年間の歴史ではなかったかを感じています。

■スペシャリストは記憶に刻まれるが……

これまでの60年をふりかえると同時に、これから先の60年間をどのように考えたらいいのかということですが、わたしは、「領域の細分化」つまり「専門性」の反対の「総合性」という視点でみていってはどうかと考えています。豊彦たちの活動というのは、「領域の細分化」を一生懸命にやってきたのですが、その半面に、「総合性」という視点が備わっていたのではないかと考えています。

わたしたちはスペシャリストをよく覚えています。たとえばテニスプレーヤーの錦織圭、女子サッカー「なでしこジャパン」の澤穂希——こういう名前はわたしたちの記憶にきちっと刻まれています。また、もう少し前の時代のアスリートであれば、カール・ルイスやセルゲイ・ブブカという名前を、わたしたちは頭の中に刻み込んでいることでしょう。

しかし、陸上十種競技のアスリートを、わたしたちは記憶に残しているのでしょうか。わたしたちは、非常に領域の狭いスペシャリストのことは、心に刻んだり、あるいは知識の中に落とし込んだりしている一方で、総合的、あるいは総合力をもった存在については、たしかに頭では「大切だ」と理解はしていますが、「すばらしい!」「すてきだ!」とは認識していません。

■「総合性」の視点をどう組み入れるか

なぜなら、「総合性」というのは、なかなか評価しにくいからです。陸上十種競技というスポーツの世界であれば、各競技の点数を加算して、そのトータルを競うというかたちで評価基準がありますが、ほとんどの活動分野では「総合性」ということについての評価基準がありません。

きょうは、「総合性」というものについて、どのようにアプローチすれば、わたしたちのなかに組み入れることができるのかということ、豊彦たちの活動を通してふりかえることができたらと考えています。

II. 貧困の撲滅と協同組合運動

■見える貧困・見えない貧困がテーマ

協同組合運動について、わたしは大きく3つの段階でとらえています。

第1の段階は、豊彦たちが取り組んできた救貧、防貧（貧困の撲滅）という運動です。当然、第1段階の次には第2段階があります。これにはいろいろな評価があると思いますが、いずれにせよ、貧困ということが時代のテーマではなくなってきた段階です。そして、第3段階である現在とこれからですが、あらためて貧困がテーマになるのではないかと考えています。しかも、目に見える、わかりやすい貧困と、見えにくくなってしまった貧困の撲滅ということが、協同組合運動に課せられているのではないかと考えています。

■スラム街での活動

豊彦たちが活動をはじめたのは、いまから約100年前、1909年の暮れです。神戸のスラムに活動拠点をつくりました。

なぜ神戸にスラムができたか——いま神戸の観光の目玉になっているのは異人街です。その異人街に暮らしていた西欧の人たちがスラムを形成したというと語弊がありますが、彼らは肉をたくさん必要としていました。当時、わたしたち普通の庶民は肉を食べなかったのですが、彼らは牛肉を必要としていました。ですから、誰かがと殺をし、解体をして、食卓に上るように精肉をしなければならぬ。そういう仕事をしたのは、じつは抑圧をされていた人たちです。抑圧され、都市からはじかれた人たちがスラムを形成し、それがだんだん大きくなって、当時の日本で最大のスラムが神戸に形成されました。

そういうなかで豊彦たちが活動をはじめます。最初は子どもたちへのアプローチでした。おとなたちにむけてもいろいろなアプローチはしていたのですが、お

となたちからは無視をされていました。しかし、子どもたちには非常に受け入れられて、温かいつながりをもつことができたようです。

たとえば明石の海岸や六甲の山で撮った記念写真が残っていますが、いずれも子どもたちを連れての野外活動の写真です。スラムというのは、悪臭や虫の発生など、非常に環境の悪いところでした。そこから子どもたちを連れ出して、たとえ一瞬でも「すてきだな」と思えるような環境に連れていくことをたくさんしていたのです。

■「みんなに知ってほしい」という願い

賀川記念館には、スラムの中の写真も多く残っています。いま、わたしたちは、携帯電話で写真を撮ったり、デジタルカメラでかんたんに写真を撮ることができますが、この時代はそうではありませんでした。かなりしっかりしたセッティングをして、カメラマンが「並んでください」と声をかけてから写真を撮っていました。当時の、大きなカメラとカメラマンの影が写り込んでいる写真を見ると、そのことがよくわかります。そこまでして撮影した写真が、賀川記念館にはたくさん残っているわけです。

このころの新聞には、写真はほとんど載っていません。文字ばかりでした。そのことから、いかに「写真を撮る」ということが稀だったかがわかりますが、そういう写真がたくさん残っているというのは、豊彦たちがみずから撮影をしていたわけではなくて、自分たちが活動していることについて、アピールをしたり、キャンペーンを張っていたのだらうと思います。ですから、わざわざカメラマンを仕立てて、取材に来ていたのです。それほどアピールをするのは、サポーターがほしい、あるいはいっしょに働くボランティアがほしい、いまやっている事業をみんなに知ってほしい、という願いが強かったからだと思います。

■医療事業の取組み

彼らの活動の中心はボランティアが担っていきませんが、いちばんの事業は医療でしたから、ボランティアのお医者さんもありました。豊彦が馬島侘（ましま ゆたか）というお医者さんといっしょに写っている写真がありますが、馬島さんは、スラムの中で診療所を開き、スラム全体のことを一生懸命に考えていきます。そのなかで、スラムが拡大しないために産児制限を研究していました。診療所は、スラムの中にあつて非常に衛生的な環境をつくっていたようです。

■魂を救う——「救霊団事業」

豊彦たちは、自分たちのことを「救霊団」と呼んでいました。すなわち、「魂を救う団体」です。豊彦の日

記を見ると、自分の名前を書くところに「救霊団」と書いて、「救霊団事業」というのがいくつか並んでいます。その1年後ぐらいの日記にも、やはり「救霊団事業」というのが出てきて、どんな事業をしていたのか、あるいは、どんな事業をしたいのか、ということが箇条書きになっています。活動をはじめて2年後ぐらいには、『救霊団年報』が出されました。

これらの日記や年報を調べていくと、その当時の事業内容が、ほぼわかります。たとえば、先ほどご紹介したように、子どもたちへのアプローチ、すなわち子どもを預かったり、散髪をしたり、入浴をさせたりする事業からはじまって、レクリエーション、医療、婦人救済といった事業をするようになりました。

なお、ここでいう「婦人」というのは、売春にたずさわっていた女性たちのことです。婦人救済の具体的な活動としては、彼女たちが自立するための夜学校をつくりました。この学校で裁縫を学んで、技術を身につけ、それによって自立していく、というプログラムを提供していたのです。

■雇用をつくる——授産事業

そのほかにも、食事を提供する、洋服を提供する、宿を提供する、お金を提供する、職業を紹介する等々の活動をしました。職業紹介所をつくったのですが、紹介しようにも雇用してくれるところがないので、みずから雇用をつくるということをやっています。いわゆる授産事業ですが、しかし、これは失敗が非常に多かったようです。

最初につくったのは歯ブラシ工場ですが、受注生産で、うまくいくはずだった歯ブラシ工場が、結局はすぐにつぶれてしまいました。製品がまともに仕上がらず、白いはずの歯ブラシがグレーになっていたのです。この原因は単純で、作業をする人たちの手が汚いというものでした。ですから、雇用をつくるというのは非常にむずかしかったようです。

また、豊彦たちは、礼拝堂を設けて、日曜日には礼拝をし、子どもたちを集めて日曜学校をやっています。これらがスラムでの初期活動の日常でした。

■見えにくい差別や抑圧、心の貧しさからの解放

スラムというのは、その核ができると、最初の原因とは違うさまざまな理由で、都市や農村からはじかれた人たちがあらたに流入してきますから、どんどん拡大していきます。

このころのスラムで撮った写真のなかに、チマチョゴリを着た女性や子どもが写っているものがあります。さまざまな理由で流入してきた人たちのなかに、アジアの国ぐにの人たちが入っています。

ブラジルのスラムで活動したパウロ・ブレイエは、

「抑圧を受けている人間が、その抑圧から解放されるもっとも楽な方法は、みずから抑圧者になることだ」と書いています。つまり、自分が抑圧する側に回ることです。社会全体から抑圧を受けている人たちが、抑圧する側に回るとするのは、スラムの中で新たな抑圧関係をつくることによって可能になった。そういう関係のなかで、スラムの中でさらに下層に追いやられてしまったのが、外国から来た人たちでした。

豊彦たちは、劣悪な環境にいる人たちを貧困から救う必要があると考えて、その生活や健康を支える活動をやってきたように思いますが、じつはスラムの中にいる人たち同士でも差別があったのです。

おとながそういう関係であれば、当然、子どもたちも差別する関係にあります。そうした差別——これも「見えない貧困」と呼んでいます——から子どもたちやおとなの人たちを解放しなければならない。それが活動のベースだったのだろうと思います。たしかに、「お金がない」とか「食べるものがない」といった「見える貧困」にたいする活動も大切です。しかし、もっと見えにくい差別や抑圧など、心の貧しさから人びとを救いたいというのが豊彦たちの願いでした。

■社会システム全体を考える——「防貧」の活動へ

豊彦たちの活動はどんどん大きくなり、ボランティアだけでなく、専従の人たちも増えていきます。わたしたちは、そういう活動の展開を「救貧から防貧へ」と呼んでいます。

「救貧」というのは、一人ひとりへのアプローチであり、ケアです。一人ひとりの生活や心をケアしていくのが「救貧」です。しかし、スラムには、どんどんあらたに人が入ってきます。一人ひとりのケアをどんなにつづけていても、あらたに人がいっぱい入ってくるのです。

そこで豊彦たちは、都市や農村からはじかれるという元の問題を解決しなければ、スラムの問題も解決しないと考え、「都市の問題を考える。農村の問題を考える。社会システムを考える」という「防貧」の方向をもつようになります。

もちろん、一人ひとりのケアをやめたわけではありません。それを片方でやりながら、社会システム全体のことを考えることが必要だったのです。そうして取り組んだのが協同組合運動でした。

III. さまざまな社会運動の「ゼネラリスト」集団として

■生活協同組合の設立

協同組合運動の最初は、スラムがあった神戸ではな

く、労働者がたくさんいる大阪でした。共益社という協同組合を設立したのです。この共益社をつくった直後に、現在の日本生協連のような、単一生協が集まる「消費組合協会」をつくります。「人と人がネットワークするところに力が生まれる」ということは、いちばん初期のころから思っていたようです。共益社も、神戸購買組合も、灘購買組合も、1920年前後のほぼ同じ時期に設立されました。

豊彦は「生協の父」と呼ばれていますが、決して豊彦が生協をつくったわけではありません。神戸購買組合は、労働運動を一生懸命やっていた青柿善一郎さんという方が中心になってつくられた運動体です。同様に灘購買組合も、那須善治さんという方が中心になって、つくっています。

では、豊彦は何をしてきたのか。それをひとことで語るのになかなかむずかしいと思いますが、協同組合の意味づけを主張した発端をつくった人といってもいいのではないかと思います。

たとえば現在、コープこうべが「中心思想」と呼んでいる7項目（利益共楽、人格経済、資本協同、非搾取、権力分散、超政党、教育中心）があります。あるいはまた、ことし、国際協同組合年の全国実行委員会が開催されて、運動がはじまっていますが、その代表をつとめている内橋克人さんは、10年ぐらい前から「人格経済」を積極的に提唱されています。このように、いろいろな場面や、いろいろなかたちで引用されている7項目ですが、その一つひとつがとても大切なテーマだと思います。

とくに最後の項目である「教育中心」は、ひとことでいうならば「人づくり」です。豊彦たちの初期活動のなかで、売春にたずさわる女性たちのために学校をつくったというお話をしましたが、豊彦たちは、自立するために学ぶ環境を整えることをバックアップし、必ず学校や学びの場をつくっていきました。それが活動を押し上げていったのです。

■労働学校の設立

同様のパターンが見てとれるのは、労働運動です。豊彦は、鈴木文治がつくった労働運動団体「友愛会」の関西支部のトップをつとめますが、労働運動で有名なのが川崎・三菱造船所のストライキです。

これは日本で最初の大規模なストライキとして評価されるものですが、結局は会社側が勝ちます。豊彦たちは、平和的にストライキをしようとして、暴力行為をセーブしていました。そういう運動をして会社に負けるわけですから、当然、批判をうけます。「非暴力などと甘いことをいうから負けるんだ」という批判です。

そうした闘争の手段や思想についての争いのなかで、豊彦たちは「こうした派閥間闘争のなかには労働者の真の解放はない」と考えます。そこで学校をつくりま

した。大阪労働学校です。次には東京にできて、全国に30あまりの労働学校がつけられました。この学校のなかで、労働者が自分たちのために学んで、自立していく環境を提供する。そういう活動を労働運動としてすすめたのです。

■農民福音学校の設立

派閥間闘争から一線を画して学校をつくるというのは、農民運動にもみてとれます。当時は、小作争議が全国に多発して、神戸では鈴木商店が焼き討ちにあうという時代でしたから、農民組合の決起大会の写真に写っている人たちをみると、生死を賭けた、血走っているような印象をうけます。当然、闘争の手段や思想による方法論の差が出てくるなかで、派閥間闘争が過激になっていきます。

こうしたなかで豊彦と杉山元治郎の2人は、農民福音学校という学校をつくります。この学校は、杉山元治郎さんの自宅を開放してつくられたのですが、講師にはすごいメンバーが並んでいました。たとえば、民芸運動をバリバリにやっていた柳宗悦や、のちに同志社大学総長になられた湯浅八郎など、名だたる人たちが並んでいて、柳宗悦が農民福音学校で美術を教えています。つまり、農民福音学校は農業の専門学校ではなく、地域おこしや農村活性化といった、いまこそ開いてほしいようなカリキュラムを提供していたのです。

■信用組合の設立

1923年に関東大震災が起こります。豊彦たちが活動をはじめたのは1909年ですから、このとき、14年がたっていました。14年間、神戸のスラムでさまざまな活動をするなかで関東大震災が起こり、豊彦たちは「東京が一瞬にしてスラムになった」と考え、14年間に蓄積したありとあらゆるものを東京にもっていきました。事業は、神戸でやったプログラムとほぼ同じような流れで、まず子どもたちへのアプローチからはじまりました。子どもたちを預かって育てるということを、最初にはじめたのです。

そのなかで江東消費組合や中郷質庫信用組合といった生協や信用組合をつくっていきます。神戸購買組合の木立義道さんは、震災救援のために豊彦たちといっしょに東京にやって来て、江東消費組合をマネジメントしました。

この木立さんも、中郷質庫信用組合の3代目の理事長をつとめたり、医療生協のマネジメントなどをしていくゼネラリストでした。医療生協は、賀川豊彦がつくったといわれていますが、実質は木立義道さんがかなりの部分をマネジメントしていたようです。

ちなみに中郷質庫信用組合は、現在も信用組合としてがんばってつづいている企業です。関東大震災をきっかけに、こうした金融事業（とくに共済）など、さ

まざまなお金を動かす事業をあらたにはじめるわけです。

関東大震災がきっかけで、高層集合住宅（当時は改良住宅と呼ばれていました）づくりにも、一生懸命に取り組んでいきます。

■「ゼネラリスト集団」として

労働学校の設立準備会のとときの写真には、スラムの中でお医者さんをしてた馬島さんが写っています。豊彦は、福祉・医療・労働運動・協同組合運動・農民運動など、いろいろな領域の活動をしたといわれてきましたが、それは豊彦だけではないのです。お医者さんの馬島さんも、労働運動や生協運動をいっしょにやり、さまざまな活動に参加しました。

馬島さんだけでなく、かなり多くの人たちが、労働運動にも参加をし、協同組合運動もし、農民運動のために農村に出かけるという、ゼネラリストだったので。「ゼネラリスト集団」といってもかまわないと思いますが、そういう人たちが労働学校や農民福音学校の設立準備をしました。

豊彦はさまざまな活動をしていきますが、ほとんどが自己資金です。その資金源となったのが著作でした。「賀川豊彦著」という著作は非常に多いのですが、じつはグループで著作をしていました。「五人のペン」というグループがいて、その人たちが賀川豊彦の講演を編集したり、小さな論文を集めてきて、編集をして、出版をするという活動をしていたのです。

IV. 歴史を背負いながら、今の課題に向き合う

■ハンセン病療養所ケア事業について

ハンセン病療養所のケアも豊彦がつぎつぎに展開した事業のなかで、大切なものでした。療養所は、いまでも全国13カ所にあります。そこで生活している人たちのケアを一生懸命にしていくわけです。

現在、ハンセン病市民学会という学会があります。だいたい毎年6月に学会がおこなわれますが、そこでは豊彦は批判の対象です。じつは豊彦たちは、隔離政策とはたかかってこなかったのです。隔離政策を前提とするなかで、療養所の中にいる人たちのケアをするという運動をしてきました。

わたしたちは、とくにわたしは、豊彦のすべてをいとは思っていません。間違いもたくさんあります。こうした過去をどのように検証していくのか。過去の人というのは、たいいてい美化されて、いい評価しか残っていきませんが、それだけではだめだろうと思います。いま、わたしたちがハンセン病療養所にどのよう

にかかわっていくのかということを考えれば、「隔離は絶対あってはならない」というスタンスに立つだろうと思います。ですから、豊彦たちの当時のポジションとはまったく違います。

■戦争責任の問題

わたしたちは、豊彦たちの活動を歴史として背負っています。これは戦争責任も同じだろうと思います。わたしたち、すなわち、いま生きているわたしたちは、先輩たちとは考えも違いますが、歴史は背負っている。歴史を背負いながら、いまの課題に向き合うことが必要だろうと思います。

その意味では、先ほど紹介した農民福音学校は、満州の開拓団の研修を引き受けていました。豊彦たちは、「満州」という存在をどのように考えていたのか——これもいまのわたしたちの研究課題のひとつです。

■平和、そして教育

彼らは、そういう戦争を体験して、戦後は「二度と戦争をくりかえしてはならない」ということで、平和運動に積極的になっていきます。そういうなかで、「世界連邦」という枠組みをつくって、それを推奨していきます。

コープこうべの中心思想の最後の項目の「教育中心」を、ダイレクトなかたちで取り組み、積極的に活動したのが「学校をつくる」ということです。保育園・幼稚園は全国に数限りなくつくりました。小学校から大学までつながった学校として有名なのは、桜美林です。桜美林という学校は、豊彦たちがつくった学校です。「人を育てる」ということを大切にしてきたのです。

V. 地球規模の問題にどのようにアプローチするか

■「バーチャル・ウォーター」

いろいろなことを考えるときに、環境のことははずせないテーマです。わたしたちの暮らしと環境はほんとうに密接につながっているからです。

みなさんは、「バーチャル・ウォーター」というフレーズをご存じでしょうか。わたしたちは、大豆や牛肉といった食料を大量に海外から輸入しています。たとえばアメリカで作られたトウモロコシが日本に輸入された場合、わたしたちは、そのトウモロコシを食べることで、トウモロコシ畑に降った雨を飲んでいることになります。そういうふうを考えることを「バーチャル・ウォーター」といいます。

また、わたしたちがオーストラリアの牛肉を食べる場合、オーストラリアで牛肉を育てるためにいろいろ

な穀物を栽培し、それを牛が食べて、その肉が精肉になって日本に入ってきます。日本は、そういった食料輸入というかたちで、海外に降った雨を大量に輸入している。そういうふうを考えることを「バーチャル・ウォーター」というわけです。

2000年のデータでは、日本は640億トンの水を輸入していました。これが2005年になると、800億トンになっています。現在、日本が使用している水とほぼ同じ分量を、海外から輸入していることになります。

食料だけでこれだけの水を輸入しているのですが、これに木材をくわえると、日本はフィリピンの森林(現在はインドネシアの森林)をことごとく伐採していることになります。それを会議資料などの紙として使っているわけですが、住宅建材もフィリピンの森林によって担われています。日本は森林国で、国土の67%をしめる森をもっています。「豊かな森林国」といっていただけますけれども、その森林は大量の木材輸入を背景にして成り立っているのです。

■暮らしと環境・水問題

暮らしを理解するというのは、なかなかたいへんな作業です。環境と食糧とエネルギー——わたしたちは、さまざまな地球規模の問題を抱えています。そういうなかであって、この「水問題」というのは欠かせない視点であろうと思います。

高知県の早明浦ダムの底に、渇水の時だけコンクリートの建物が現われるのをご存じでしょうか。早明浦ダムが造られるとき、「ダムにしないでほしい」という村の反対派の人たちが、コンクリート造りで役場を新築したのです。しかし、活動むなしく、結局はダムになってしまいました。

わたしたちが毎朝、飲んでいるコーヒーにしても、コーヒー豆を育てるプランテーションは柵で囲われていて、そこに降った雨はわたしたちが飲むコーヒーを育てることだけに使われているのです。では、そこにもともと暮らしていた人たちは、いったい何リットルを自分たちの生活に使えるのか。そういう表と裏の問題は、わたしたちの暮らしと常に密接につながっているのです。そういう問題をすべて抱えながら、さまざまな身の回りの課題を考えなければいけない。そういうときをむかえていると思います。

VI. 「プラスのシェア」「マイナスのシェア」

■一人は万人のために、万人は一人のために

共生——いい古されてきたフレーズです。共に生きようとするれば、降った雨をみんなでシェアし、あるいは

は石油のような枯渇資源をシェアすることが不可欠です。そういうものを、わたしは「プラスのシェア」と呼んでいます。

「プラスのシェア」という呼び方があれば、反対に「マイナスのシェア」もあります。「マイナスのシェア」というのは、痛みをシェアするということです。

「一人は万人のために、万人は一人のために」は、協同組合運動のなかで、わたしたちがずっと使ってきたフレーズです。「一人は万人のために」というのは、「わたし自身が志をもって、みんなのために何ができるだろうか」と考えることで、ほとんどの人たちが一生懸命に考えます。これが「プラスのシェア」です。一人ひとりの志が、いろいろな人に恩恵をもたらして、シェアされるわけです。

一方、「万人は一人のために」というのは、「マイナスのシェア」のことをさしています。「万人は一人のために」の「一人」は、痛みをもっています。痛みをもっているからこそ、万人の寄りそいが必要なのだと思います。

したがって、「一人は万人のために、万人は一人のために」というフレーズは、「プラスのシェア」と「マイナスのシェア」がセットになった言葉です。しかし、わたしたちは「マイナスのシェア」が苦手です。志をもって何かをやろうということには、積極的にみんなチャレンジしますが、痛みをシェアするというのは、「わたし」が傷つかなければいけない。できれば傷つくのはさけたいと、誰しも思います。

■東日本大震災と国際協同組合年

しかし、震災に直面したとき、わたしたちはみんな、ちょっとずつ痛みをシェアしようと思ったのです。苦手ではありますが、そういう気持ちはもっていますから、東日本大震災があって、ことしが国際協同組合年だということは、まさに意味が大きいと思います。震災は、「痛みをシェアする」という、苦手ではあるけれども、わたしたちに内在していることを呼び起こしてくれました。ですから、みんなが手をつなぎ合って、それをもっと積極的に展開していくことが、国際協同組合年のいちばんベースにあることだろうと思います。

たしかに、震災のような特別な状況は、いろいろなことを気づかせてくれます。しかし、「痛み」というのは、わたしたちの日常のなかにたくさんあります。NHKが「無縁社会」というフレーズを広げてくれましたが、人知れず死んでいく「行旅死亡人」、つまり、その死因もわからず、看取られることなく死んでいく人たちが3万人います。いろいろなところで縁がなくなってきたから、このような状況が起こるのです。

もっと前からいわれているのは、自殺をする人が年間3万人いるということです。自殺未遂は、その3倍

の9万人です。毎年毎年、約12万人の人たちが強い「痛み」をもっているのです。

■すぐ隣に「痛み」をもっている人がいる

肝心なのは、この人たちの周辺の人たちです。わたしの小さいころからの親友が、長男を自殺で亡くしました。もうずいぶん前のことですが、いまだに彼は笑いません。その「痛み」はつづいています。毎年12万人の人が、自殺したり、未遂だったりする。そして、その周辺の人たちは、その影響で強い「痛み」をもちます。その「痛み」は連続するのです。連続する「痛み」をあらたにもつ人が、毎年毎年増えていくのです。

いま、いったい何人の人が強い「痛み」をもっているのでしょうか。きょう、ここに100人の人たちがいたとすれば、たぶん2人は、このような強い「痛み」をもっています。東日本大震災で、わたしたちは、非常に強い「痛み」をもっているということをリアルに感じました。それと同時に、日常のなかで、すぐ隣に強い「痛み」をもっている人がいるのだということに覚えていただきたいと思います。すぐ隣に、寄りそうことを待ち望んでいる人がいる——このことが大切なのではないかと思います。

VII. むすびに～2つの大切にしたいこと

■人と人は、愛し合い、助け合う

豊彦たちは、救霊団で福祉活動をし、協同組合運動をし、災害があれば災害救援団になり、労働運動や農民運動もしてきました。これらの活動にたいして、わたしたちは活動の領域を分類して、「いろいろな領域が複合的に存在する」というふうには評価しますが、ほんとうに領域を分類してきたのだろうか。これはいまのわたしたちの研究課題です。

そういう活動を貫いていたのはキリスト教信仰（これは豊彦個人の考え方もかもしれませんが）であり、愛です。「人と人は、愛し合い、助け合うものだ。それがいちばん大切だ」という考え方が貫かれていたのだらうと思います。そういうメッセージを伝える事業も、たくさんしてきました。多くの人たちに理解してほしい、知ってほしいということで、日本だけでなく海外でも、ほんとうに大勢の人たちに伝えようとしてきました。

■いろいろな活動を一体のものとして

これまで紹介してきたいろいろな活動が、お互いに連関していたということは、以前からいらわれていました。しかし、わたしは、そうではなく、ほとんど一体

だったのだとうけとめるようになってきました。しかし、単純に「昔は一体だったよね。別々の活動ではなかったんだ」というひとことで片づけてはいけなと思います。

単純に「どの領域も一体だった」となると、理解を超えた存在になってしまいます。そうすると、そこから得るものは何もない。いま、わたしたちが向き合わなければならない地球規模の問題に、どうアプローチするのか。そのために、いま、わたしたちがとらわれている「物ごとを細分化して分類していくこと」から、どのように抜け出すことができるのか。これがいちばんのテーマであります。

■総合性を大切にすること

いろいろなお話をしてきましたが、大切にしたいことは2つです。

ひとつは、「総合性」を大切にしようということです。物ごとを細分化し分類していくのではなく、細分化し分類してきたものを、いったん壊してみる。これはなかなかむずかしいことです。「消費者組合」と「生産者組合」という分類を壊して、いったい何が出てくるのか。そういってしまうと何もできなくなってしまいますが、とりあえず、細分化してきたものをもう一度見直すことが必要ではないかと思います。

■痛みをシェアすること

2つめは、「痛みをシェアする」ということです。すぐ隣に、あるいは東日本に、シェアすべき「痛み」が蔓延しています。

最初にお話ししましたように、「見える貧困」と「見えない貧困」ということを、わたしたちはこれからテーマにしていかなければなりません。そういうなかで、「総合性」と「痛みをシェアする」ということを大切にしていきたいと思います。

■一人ひとりを大切に、一つひとつの活動を積み重ねていくなかで、あらたな社会が見えてくる

きょうは京都府生協連創立60周年の記念式典で、ほんとうによろこばしいときですけれども、わたしたちが背負っている課題は山ほど大きく、そして、つらいものがあります。いまこのときに、わたしたちは鉢巻きを締め直して、一人ひとりを大切に、協同組合運動を広げていくことができたらいいなあとと思います。一つひとつの活動を積み重ねていくことが大切であり、そのことに希望がありますし、あらたな社会が見えてくると思います。

長い時間お付き合いいただき、どうもありがとうございました。

(拍手)